

昭和初期の名古屋能楽界

——「能楽堂」以外での催しを中心に——

はじめに——能楽師協同問題と

梅若流・劇場演能問題

「国民新聞」大正十年七月六日に「六郎除名さる」の見出しで、梅若六郎・萬三郎・観世鍊之丞の「梅若派」が観世流家元観世元滋より除名された記事が載る。梅若派は「東京朝日新聞」七月二十六日夕刊に「梅若流遂に自立す 初代家元は万三郎」の見出しで七月二十四日に梅若流樹立の宣言をしたことを載せる。観世と梅若の争いは、免状発行権の問題であるが、その争い自体は、それ以前から存在した。大正十年の時期にそれが「除名」という形で行なわれたのは、この時期に「能楽師協同問題」が能の保護者・愛好者の団体であった「能楽会」にとって切実な問題となったからである。「国民新聞」大正九年三月十九日に「是れは梅若流問題といふよりは能楽師協同問題といふべきで、其の発端は一昨年徳川家達公が能楽会々頭となられし時のことである。徳川会頭就任当時の宣言に、能

飯塚 恵理人*

楽前途の爲めには資金も必要なるべく楽師養成も必要ならんが、第一能楽師が協同一致もなくは何事も駄目だと思ふ」と書かれている。それ以前は財力のある華族や財閥が鼻息する役者を丸抱えで「保護」「愛好」し、その公演も少数の人が金を出すことによって行なってきたが、東京でも大正十年ごろにはそのシステムが成り立たなくなりつつあった。「能楽会」が、個人としてではなく協同で出資して能を保護するためには、会として「保護をする能楽師の範囲」と「養成すべき能楽師の流儀・師匠」を決める必要があった。「能楽」が上流階級のものというイメージを守っていた一つが「能舞台」であり、「能舞台」以外の「劇場」での演能の可否が大正期の能楽界では大きな問題となった。「東京日日新聞」大正八年十二月十九日には、能を帝劇で一般の人々に公開してはどうかという趣旨の運動をしている人がいることと、「一方梅若六郎氏は、『私の方は絶対にお断りする、又さうした希望も持つて居ない』と突ッ放して理由は語らないが、俳優を河原乞食と軽蔑して来た伝習的な古臭い觀念に囚はれて居るらしく、斯くして能楽の民衆化は今の所手掛

りが無い」と、能楽堂以外で一般の人が観ることがないと、能楽の「民衆化」は出来ないと述べている。大正期の能楽堂は升席主体で、催しの年会費を払った人が観ることが大半であった。所謂「会員制」であったため、「中流以上」の人でないとなかなか観ることが出来なかった。「劇場」「公会堂」など「能舞台」以外で能を行なう意味は、能楽堂よりも大人数を収容することが出来、チケット代を抑えることが出来ること、升席ではなく「一人席」で販売できるので、「升席」分は購入できない「一枚」購入者を相手にすることが出来る点にある。しかし、能楽師は「能舞台」以外の演能には非常に消極的だった。「山形新聞」大正十一年七月十日では、「一切の犠牲も水泡に 能楽大会は御流れ 切なる委員の熱望も古色蒼然たる因襲に敢無く蹂躪されて血涙に咽む主催者」という見出しで、「山形県観世支部では宗家観世元滋氏を筆頭としワキ師として全国に謳はる宝生新氏其他観世一門を招聘し、昨日正午前九時から第二公園仮能楽堂（千歳座）に於て華々しく能楽大会を催す筈の処、頑迷なる宗家側の時代錯誤観と、宗家家憲とも称すべき『劇場、活動常設館に於ては絶対能楽を禁ず』との会則から、催能会長岸甚蔵及同委員長佐藤久吉両氏を始め市内謡曲家が所有設備を施し盛会を期した能楽大会は突如中止となり、会員千五百名に達した夫等人々に多大の落胆と悲観を与へた」と、観世元滋が用意された舞台が劇場であったことを理由に能を演じずに帰京したことを伝える。

昭和二年六月十八・十九日、東京においては、朝日新聞社という「新聞社」が催主となり、「朝日講堂」で能を催し、升席・年会費ではなく一人席・一回限りのチケットを売り出して大きな興行的成功を取めた。この催しには、観世元滋も出演している。朝日新聞社の第二回目にあたる昭和二年十月十八・十九・二十日の能では、十九

日の金剛右京の《土蜘蛛》⁽⁷⁾を、初めてラジオで舞台上継し、興行的成功とともに、能を能楽堂に行かない「ラジオの聴衆」に聴かせるという画期的な催しだった。歌舞伎のような庶民芸術と「能楽」は異なるのだという矜持のもとに、従来能楽堂以外では能を催さないという原則を破り、家元が「講堂」での能に出演すること、従来の能楽の後援者と異なる「新聞社」が能を催すことは能楽界において大きな事件であった。ただ、実は、これは「能楽協会」に所属する「家元」級の人が能楽堂以外で能を行なったというので大きな話題になったので、観世宗家から除名され、他の能楽師の舞台を使うことが出来なくなった梅若流が地方で能を行なうとき、能舞台以外で上演した例はその前にある。大正十二年三月十七日「大阪毎日新聞」⁽⁸⁾を引用すると

復興されたる勸進能 梅若流能楽開催

第二回民衆娯楽会 主催 民衆娯楽研究会後援 大阪毎日新聞社

民衆娯楽研究会の第二回として「梅若」の能楽を汎く一般に紹介いたします。（中略）梅若は先頃観世から分れ在来の五流から離れて「梅若流」なる一流を樹て、芸術の真価値とは没交渉な旧習慣の束縛を断ちて奮闘的活躍を試みてゐます。能楽のみに作られた能舞台以外で本式の能を演ずる事は、在来五流では今以て賛否の態度が決せられず宇宙に迷つてゐる折柄、梅若は敢然として古い因襲を破り大阪中央公会堂に立つ決心をしました。そして民衆娯楽研究の趣旨を体し、古来誤つて一部階級の占有物視されてゐた能楽を、すべての人々の前に提供してその鑑賞を得ようとするのであります。（中略）中央公会堂の舞台は、今回の催のため新規に掛出し舞台を設けます。

出演者は梅若万三郎、六郎兄弟、観世鉄之丞、並に梅若一門諸氏拳

つて来阪します。

番組〔抄記〕 橋弁慶（観世鉄之丞）、羽衣（梅若万三郎、青木只一）、望月（梅若六郎、山口直知）、素謡 草紙洗小町（梅若六郎、観世鉄之丞）

三月二十五日午後一時 中之島中央公会堂 会費 特別席（二人）五円 普通席（二人）三円

というものである。梅若六郎は、前述の通り大正八年十二月時点では劇場で能を行なう希望はないと報道されていた。大阪の「中央公会堂」での能を行なったことについて、「公会堂」は「劇場」ではないという弁明も出来るが、やはり能楽堂を借りることが出来なかつたためと思われる。会員制ではなく、「一般」の人々がチケットを購入することから、曲柄も《橋弁慶》《羽衣》《望月》と初心者筋の分かりやすいものが選ばれており、席も「一人」単位での販売である。新聞社が主催して能を催す例として、かなり早い例であると思われる。

昭和初年の名古屋においても、昭和五年十月の名古屋公会堂の舞台披、昭和六年四月の名古屋能楽堂完成直前の時期の新愛知新聞社主催の能、昭和六年十月の名古屋梅若会、昭和十年十一月の朝日会館での能など、「能舞台以外」での能が行なわれている。実際にはもっと行なわれていた可能性があるが、あくまでも現時点で管見に入つたものについて、名古屋において「能舞台」以外の催しはどのような意図で、どのように行なわれたのか、当時の新聞記事を元に見て行きたい。

一 名古屋公会堂の舞台披

——観世左近と宝生重英の来演——

昭和五年十月十日、鶴舞公園に名古屋公会堂が開館した。これは、名古屋市が人口百万人を突破した記念事業として行なつた事業の一つだった。このときの式典で能が上演されたことについて、田鍋惣太郎は、「丁度この頃（飯塚注・昭和二年頃）呉服町の舞台は漸く老廃に傾き、そろそろ新舞台の建設をと私共も心がけてその準備に取りかかつておりましたが、新舞台の落成にさきがけて、昭和五年十月名古屋市公会堂が落成し、その舞台披きの演能が二日間に亘つて行われたのであります。この時の裏話を致しますと、初めこの舞台披きには六代目菊五郎を予定していた処都合で能をという事になり、急に私に話があつたので私は大急ぎで観世左近氏と宝生重英氏（現九郎）に電話して番組を作つたのであります。初日には『翁』（観世左近）を、二日目には『狸々』（宝生重英）でありましたが、この時の舞台は急造で橋掛りは松の代りに竹をおき、その上見付柱もなかつたので、演者が困られたという事でした。それでその後公会堂での演能には短い見付柱だけを建てたという様な一つ話があります」と述べている。

この催しの能の出来に関する能評は管見にない。観世左近、宝生重英という第一人者を招きながら、この催しが「能」を鑑賞するためのものではなく、名古屋市の人口百万人突破を祝賀する式典の「余興」という位置づけであつたことが大きな理由であろう。この祝賀会には名古屋市の関係者と公会堂建築に寄付をした人々が招待されており、メインはあくまで「式典」にあつた。

「新愛知新聞」昭和五年十月十日第七面は「大名古屋市人口百萬祝賀紀念号」となっているが、「人口百萬を突破し 四大事業も完成 錦繡紅葉織りなす鶴舞公園に けふぞ壽ほぐ記念式」の見出しで事業と記念式について伝えている。

五層城頭の金鯱かゞやくところ、よく天の時と、地の利と、人の和とを得、市制施行以来四十一年にして人口百萬を突破し、押しも押されぬ全国第三位の大都市たる外形と内容を兼ね備へた、われらの若き大名古屋市は、折柄錦繡の紅葉、秋陽に彩らるゝ吉辰を卜し、十月十日、十一日の両日に亘つて、花々しく鶴舞公園に記念大会を催し全市を挙げて祝福、喜悅の行進曲を奏する事となつた。殊に完成された四大事業——中川運河の開鑿、第三期水道拡張、下水処理場、公会堂の建設の如き、何れも誇るに足るものばかりである。われらはこゝに此の記念大会を祝賀し、新進都市たる中京の、今日に至るまでの足跡を回顧すると共に、更に強く明日の躍進を待望してやまぬものである。

とある。四大事業とは、①中川運河の開鑿、②第三期水道拡張、③下水処理場の建設、④公会堂の建設であるが、このうち公会堂は、大部分市民の寄付によって建てられたことに特徴があつた。このことは、同じ七面に

公会堂 一、公会堂は今上陛下御成婚記念事業として計画され、昭和二年四月起工今回完全を見たもので鉄骨鉄筋コンクリート造近世式四階造建坪七百八十三坪延坪三千五百六十一坪の大建築である、大集会室は坐席二千七百を有し予備椅子を入れると裕に三千人を収容し得るもので先づ日本一の大公会堂と云つても過言でなからう、総工費は二百二十萬圓を要し大部分は市民の寄付で鶴舞公園北隅に異彩を放つてゐる。

というものであつた。同紙面の「都景五章」に「公会堂 大衆の座に菊の香や氾濫す」とあるように、公会堂は「大衆」の建物であり、そこで「菊の香」に象徴される「高級な文化」が行なわれるというところに市の「事業」の眼目があつたと考えられる。

「新愛知新聞」昭和五年十月十一日は「大名古屋の成長を寿ぐ日 鶴舞公園へ鶴舞公園へと大衆ぞくぞく殺到 お祝気分正に最高潮」の見出しで、鶴舞公園での祝賀会の様子を伝える。これは、

グレート名古屋の人口百萬突破と四大事業の完成とを記念すべき十日の朝は、夜来の小雨なごりなく晴れて絶好の祝賀日和である、軒並に立つ日章旗はヘンボンと翻り「我等のナゴヤ」の成長を寿ぐ行進曲を奏でてゐる 大会場の鶴舞公園は清掃よろしく朝九時すでに老若男女の群がこの日の歡喜に嬉々として處々に打寛いでゐる、

午前九時五十分東久邇宮殿下が御來場遊ばされる、邸宅其他を市や町へ寄付して晴れやかな心境にある徳川義親侯の顔が見える、その他礼装の來賓続々來集、式は始まつた、噴水塔の辺には市民が粋めき合つて式の経過を打まもる。

◆ 十一時二十分、会堂正面の三つの扉が一斉に開いて宮殿下を御先頭に來賓が溢れ出た、式が済んで殿下の御帰還である。

◆ かくして幾千の來賓は列をなしてコスモスの咲き乱れる花園を縫つて園遊会場へ繰込んだ 此處は音楽堂□□たる樂の音と共に一般衆興場に当てた普選壇からは誘ひの太鼓が響いて来る。

とある。式が終わつたのは十一時二十分である。CK（飯塚注…JOCK）では十一時から十二時まで《翁》のラジオ放送をしている

が、始まったのが二十分以降であることを考えると、十二時に放送が終わったとすれば、短縮したか、途中で切れてしまったものだろう。「新愛知新聞」昭和五年十月十日夕刊一面には「園遊会 能に踊に唄に」として「式後公会堂ではステージにおいて能楽『翁』の演技あり三千の来賓は観世左近の神技に魅せられ、これに続いて名古屋五連妓からすぐつた精鋭美妓の名古屋踊りに移り常盤津「勢獅子劇場花誉」新曲長唄『幸市園之賑』の舞踊、羽田歌劇などがあり一方奏楽堂を中心に盛んなる園遊会が催され祝賀気分が漲つた」と書かれている。但し、主賓の東久邇宮は帰還し、来賓も「溢れ出」て、園遊会の会場に行つたという表現から考えると、観世左近の《翁》を観たのは、能が好きな来賓に限られ、大多数の来賓は園遊会に行つたと考えるのが自然だろう。

記念祝賀会は翌十一日も行なわれ、その様子は「新愛知新聞」昭和五年十月十一日夕刊に「百萬突破記念大会けふ第二日 歓喜に酔ふ市民代表三千 盛大に挙行された祝賀式」の見出しで、

名古屋市人口百萬突破記念大会第二日目十一日も前日同様鶴舞公園新築公会堂で盛大に挙行された この日の来会者は市内各町総代、衛生組合長、在郷軍人会長、青年団長ら二千七百余名で第一日のモーニング、シルクハット姿の来会者の多かつたのに較べけふは紋服姿の人達が大多数を占め中には在郷軍人会長の正装の人や団長服の人も見受けられた、かくて午前十時、電鈴によつて一同着席し一澤助役は急霰の如き拍手に迎へられて開会の辞を述べ、次いで一同起立の裡に国歌君ヶ代のピアノ演奏あり、続いて大岩市長は満場の拍手を浴びつ、正面に立つて式辞を述べ、来賓の祝辞に移り濱口総理大臣、坂部第一師団長、神戸市長（各代読）今堀名古屋市会議長の祝辞あり、これより今回竣工式をあげた中川運河、第三期水道拡

張事業、下水処分場、市公会堂の事業概要を映画によつて報告し青木助役の閉式の辞で十一時半大会を終つた、式後公会堂ステージで宝生流宗家の能楽あり終つて正午から奏楽堂を中心に市内各連妓の幹旋で盛大なる園遊会が催され午後一時から更に公会堂ステージで五連妓からすぐつた美妓の名古屋踊り、羽田歌劇などがあり祝賀気分が漲つた

とある。来賓が異なるという以外、基本的な構成は初日と同じである。

「新愛知新聞」昭和五年十月十日のラジオ欄「今日のラヂオ 名古屋（JOCK）」には、観世左近による舞台披が放送されたことを伝える。

【十一時】能楽（鶴舞公園内公会堂ヨリ中継）「翁」謡 観世左近、面箱 井上彦四郎、千歳 谷村直次郎 三番叟 井上菊次郎、笛 藤田豊二郎、小鼓 田鍋惣一郎、同 田鍋惣太郎、同 青木恒治、大鼓 西尾孫太郎、太鼓 野崎光之丞

【正午】時報、氣象通報、経済市況（中略）
【二時十分】舞踊（鶴舞公園内公会堂ヨリ中継）常盤津「勢獅子」長唄「新曲幸市園の賑」名古屋五連妓芸妓連中

開館の初日、観世左近の次に「芸妓」が踊っている。このことにより、この公会堂は純粹な「劇場建築」であるはずで、能楽師の演能は大正時代ならば当然拒否されたと考えられる。少なくとも「芸妓」の踊つた後に能を舞うことはしなかつたであろう。しかし、その翌日に宝生重英が舞っている。これもラジオ中継された。「新愛知新聞」昭和五年十月十一日より引用すると、

【十一時】狂言（鶴舞公園公会堂ヨリ中継）「福之神」河村鍵三郎、井上新三郎、河村丘造 △能楽（同）「狸々」謡 宝生重英、同

西村弘敬、笛 鈴木直恒、小鼓 福井初太郎、大鼓 永田虎之助、
大鼓 鬼頭為太郎

【正午】 時報、氣象通報、経済市況

となる。鶴舞公園からのこの日の中継放送はこの能・狂言のみである。ただ、式典が終わった時間が十一時半であることを考えると、『福の神』を全部放送したら『狸々』は放送出来ない。どのような形で演じたか、放送したかの資料がないのが残念である。

この公会堂の能は、基本的に「名古屋市」の企画で、祝賀会の「式典」のあとの「余興」として行なわれた点に大きな特徴がある。名古屋能楽会のように会員が年会費を払う催しでも、席のチケットを売る形式でもなく、観客は全て「名古屋市」の「来賓」であった。この式典は、東久邇宮・徳川義親などの貴顕の招待によって権威付けられたもので、市の公会堂の「舞台披」という意味付けもあった。しかしながら、「能」を主体とする催しではないため、実際に能を観たのは招待客でも能が好きな人であったと考えられる。この時期には、能は上流階級の高級な趣味というイメージがあったが、そのイメージを守るために劇場では演じないというようなことは既に出来なかった。地方でも、芸妓による「名古屋踊り」の行なわれた舞台で舞うことが特に非難されることなく行なわれた。また、ラジオ放送も、「祝賀会」の放送の一環として、能楽の放送を行なったと考えるのが自然であろう。この放送は、能としては前後が切れてしまい、不完全な形であったと考えられる。祝賀会の「高級感」を出すために能を上演し、ラジオで放送したと考えるのがよいだろう。

二 新愛知新聞主催 春季能楽大会

名古屋能楽堂は、昭和六年四月二十三日に開館するが、その直前の四月三日に、新愛知新聞社主催の能が、鶴舞公園の名古屋公会堂で行なわれている。田鍋惣太郎が昭和五年十一月に「布池能楽堂工事中を利用して私は名古屋の楽師十一名を引率して上海に渡り演能いたしました」とあるように、布池の名古屋能楽堂の工事にかかったからは呉服町能楽堂は閉鎖されて使用できなかったと考えられ、この時期実質的に能舞台での能は出来なかった。しかしながら、この催しは、地元の能楽師の能を新聞社の企画で行なっている点に大きな特徴がある。

「新愛知新聞」昭和六年四月三日には「本社主催 いよいよ今晩六時より 春季能楽大会 会場・名古屋市公会堂」の広告が載る。但し入場料金は書かれていない。これは夜能であったため、四日には記事が載らず、五日に載る。「新愛知新聞」昭和六年四月五日には、「華々しく開かれた 本社主催 春季能楽大会 市公会堂に観衆溢る」の見出しで、

一般好楽家から絶大なる人気を以て期待されてゐた本社主催の春季能楽大会は三日午後六時から鶴舞公園名古屋市公会堂に於て華々しく開催されたが流石に古い伝統を有する一大芸術である処から各方面に一大センセーションを巻き起してゐただけに観衆は定刻数時間前既に会場入口に長蛇の列をつくり続々来場 満場字義の如く立錫の余地なき盛況を呈した、かくて定刻本社峰崎記者の開会辞、金森本社事業部長の挨拶に次で本社囑託水野申三氏「能楽の姿」と題し能楽の趣味に就て講演がありいよいよ能楽に移れば先づ能「芦刈」

は飯田鞆恵氏のシテに吉川翠溪氏のツレ 脇が西村愛三氏西尾孫太郎氏の太鼓、山田耕平氏の小鼓、国井四郎氏の笛、野村二郎氏の地頭は流石にシツクリと合つた呼吸に充分其達意的動作をみせ続いて一調は金春流第一人者として知られてゐる本田秀男氏の謡に福井五郎氏の小鼓を配した放下僧は実に美事な気込みに満堂固唾を呑み、終つて齋藤安次郎氏のシテ、西村弘敬氏の脇、木造大観氏の大鼓、高橋栄次氏の小鼓、鬼頭八郎氏の太鼓、金森準三氏の笛に依つて演ぜられた「羽衣」はことに観衆に多大な感動を与へそれより井上彦四郎氏の狂言「花折」は充実された芸力に大喝采を博し最後に斯界の権威柴田初太郎氏の「小鍛冶」は西村弘敬、杉山大六両氏を相手に西尾孫太郎氏（大鼓）守屋壽石氏（小鼓）山田一郎氏（太鼓）鈴木直恒氏（笛）といふ権威揃ひの囃で其上飯田鞆恵氏の地頭と相俟つて実に独特の妙技を演じかくて能楽大会は近來稀に見る大盛會裡に十一時終演した

と書かれている。水野申三による講演つきで、能が《芦刈》《羽衣》《小鍛冶》、狂言が《花折》であることから、初心者を意識した催しであると言えるだろう。東京からの役者は一調の謡を勤めた本田秀男のみで他は全て名古屋の能楽師である。名古屋でも、昭和六年には名古屋能楽会のみならず、新聞社が主催して能を催す素地があり、それが成功するだけの観客層があったといえる。現在私の手元には戦前の名古屋の新聞社の催しの番組は他にない。このような新聞社による催しがどの程度あったかについては、今後さらに調べる必要がある。

三 名古屋梅若会——新愛知新聞社後援の催し——

大正十年に観世流を除名されたことよつて、梅若流は能楽協会に加盟することは出来なくなった。能楽協会に所属するシテ方の他の流儀や、囃子方・狂言方の出勤も断られた。このことよつて、梅若流は「能楽会」の保護を受けず、能楽協会に加わらなかつた囃子方・狂言方に出勤を依頼し、シテ方が脇を演じ、能を続けた。これは梅若流に三井家など強力な後援者がいたから可能であつた。梅若流は昭和六年十月五日に一門を率いて名古屋市公会堂で能を行なつてゐる。昭和六年四月には、布池町に名古屋能楽堂が開館してゐる。しかしながら、ここは「名古屋能楽会」が管理している建物であり、ここで能を演じることが出来ない。このようなことから、名古屋市公会堂で演じたと考えられる。「新愛知新聞」昭和六年十月三日には、「日時 十月五日午後五時半開演 会場 名古屋市公会堂 梅若流能楽大会 申込所 其中堂書店（門前町）中惣南店（本町西）静観堂書店（本町東）松坂屋、亀末廣菓子舗（朝日町）」【本社後援】主催 名古屋梅若会 ¥3,000（指定席）¥2,000 ¥1,000」という広告が載つてゐる。注意すべきは、小鼓方田鍋惣太郎の経営する中惣南店が入つてゐるように、チケットの販売場所が全て名古屋能楽会の券を扱つてゐる店であることだろう。「芸事上の交際」は出来ないが、切符の販売は引き受けてゐる。名古屋梅若会の観客は、かなりの部分が名古屋能楽会の観客と重なつてゐたと考えてよいだろう。

「新愛知新聞」昭和六年十月四日⁽²⁾には、「本社後援 梅若流能楽大会 愈よ明ばん市公会堂で すばらしい人氣」という見出しで、

能楽界の権威梅若萬三郎梅若六郎両師を始め一門三十余名が久々の演能であるといふので素晴らしい人気を以つて期待されてゐる本社後援、名古屋梅若会主催の梅若流能楽大会はいよいよ明五日午後五時半から鶴舞公園市公会堂で開催されるが、

能組は通小町、梅若萬三郎、梅若亀光（梅若武士）、葵上、梅若六郎、梅若猶義（梅若萬佐世）、夜討曾我、梅若萬三郎、梅若六郎、狂言棒縛、恩地伊太郎、武藤達三、其他仕舞数番あり 会員券は三円（指定席）二円、一円等で下記申込所で取扱つてゐる中区門前町其中堂書店、広小路本町中惣南店、同静観堂書店、東区朝日町亀末廣菓子舗、松坂屋（写真右上から梅若萬三郎梅若亀之、左上から梅若六郎、梅若萬佐世諸氏、中央は葵上シテ六郎氏）

と写真入で広告されている。「本社後援」と書かれているが、この「後援」の内容は明らかではない。ただ、新聞社の後援の効果がもつともはつきりしているのは、自社の新聞記事において広告するということであろう。

この会の様子については、「新愛知新聞」昭和六年十月六日に「華々しく開かれた 梅若流能楽大会 満堂の聴衆伝統的芸術に酔ふ」という見出しで、

絶大な人気で一般好楽家から期待されてゐた名古屋梅若会主催本社後援の梅若流能楽大会は五日午後五時半より名古屋市公会堂に於て華々しく開催されたが流石我国伝統的芸術である能楽界に一流を樹立した梅若萬三郎、六郎両師の演能は久しく渴望されてゐた事として続々来場した観衆は定刻前既に満員の盛況を呈し、やがて電鈴の音ひびき渡るや湧くが如き拍手に迎へられて開演の幕はあげられ先づ能「通小町」より生まれ梅若萬三郎（シテ）梅若亀之（ツレ）梅若萬佐世（脇）斎藤喜一郎（大鼓）大倉宣利（鼓）杉山立枝（笛）

諸氏はシツクリ合つた呼吸と其達技的演能振りに満堂固唾を呑み、次いで仕舞に移り、中山得二（楊貴妃）青木只一（清経）小山健太郎（嵐山）は実に美事な舞振り演技を演じ続いて梅若六郎（シテ）梅若猶義（ツレ）梅若武士（脇）金子一（脇ツレ）斎田喜一郎（大鼓）濱田嘉一郎（鼓）南條秀治（太鼓）宇都木寛（笛）諸氏に依つて演ぜられた能「葵上」はいづれも優ぐれたる技芸に観衆に多大な感動を与へそれより武藤達三、恩地伊太郎両氏の狂言「棒縛」から山口直知（松風）梅若亀之（笠之段）梅若武士米倉康之（龍虎）諸氏の仕舞はこれ又充実された技力に割れんばかりの喝采を博し愈々最後の能「夜討曾我」は梅若萬三郎（十郎）梅若六郎（五郎）両氏の立方に佐伯實（大鼓）大倉宣利（鼓）杉山立枝（笛）諸氏の囃で恩地伊太郎氏の大藤内と相俟つて流石は斯界の権威として独特なる妙技に満堂を恍惚とさせかくて梅若流能楽大会は大盛會裡に九時半終演を告げた

と載る。梅若流に所属するシテ方・囃子方・狂言方を全て東京から連れて来ている。地元の能楽師は一人も参加していない。この意味で興行としては大製作費のかかるものだったと考えられる。しかし新聞によつて宣伝することによつて、このような地元にも全く所縁のない能楽師であつても、ラジオによつて声知られており、東京で有名な能楽師であれば催しが出来たといえる。しかしながら、囃子方・狂言方までも連れてこなければならぬ梅若流の催しは地方ではやはり不利で、戦前の名古屋ではこの催し以外管見にない。

四 朝日会館での催し ——朝日新聞名古屋支社発刊記念——

東海三県の朝日新聞は、昭和十年十一月二十六日の夕刊より、大阪朝日新聞名古屋支社が発行することとなった。そしてこの二十六日、名古屋支社による新聞発行を記念して能が行なわれた。「大阪朝日新聞」昭和十年十一月二十七日市内版には、「大家の至芸に観衆たゞ恍惚 新装の朝日会館に繰展げられた 能楽鑑賞の夕」の見出しで

本社社会事業団主催の名古屋能楽会後援の第三回能楽鑑賞会は二十六日午後四時らか新装の名古屋朝日会館にて開催、これより先会館には木の香も清がすがしい舞台を仕組み浄めの式を行ひ一同列席冷酒を飲み交した、能組は金剛巖氏の「翁」に舞台をバツと明るくしてお祝ひ気分を満喫したが○×のマイクが中継してラヂオファンにも親しくこの実況が伝へられた、やがて賑やかな囃し面白く狂言があつてのち「景清」が観世流の重鎮橋岡久太郎氏の至芸によつて巧に観客を惹きつけ最後に金剛巖氏の弁慶の金剛か金剛の弁慶かといはれる大芸術を舞台一ぱいに繰展げて「船弁慶」を熟演し稀に見る盛会の裡に九時鑑賞の夕を閉ぢた

とある。来場者の数はここに記されていないが、朝日新聞名古屋支社の新聞発刊の催しを○×からラヂオ放送していることは注目されるだろう。東京朝日新聞社の東京の朝日講堂での能は、能の能楽堂以外での上演を一般化し、能をラヂオで舞台中継することによって普及し「民衆化」しようとする先鞭をつけたものだった。名古屋支社の発刊の日にこのような催しをしているのは、このような「普

及」の催しを名古屋でも行なうことを自社の記事とラヂオによって宣伝する目的があつたものと考えられる。

まとめ

大正八年末、能が能舞台以外で催されることはなかった。大正十二年に梅若流が大阪で公会堂での能を行ない、昭和二年には観世元滋など家元が東京の朝日講堂で能を行なった。これらはいずれも大阪毎日新聞社、朝日新聞社という新聞社の企画であった。この動きは名古屋にも急速に影響を与えた。名古屋公会堂の開館記念の能は名古屋市の企画で全員招待客である。あとの三回はいずれも新聞社が企画・宣伝に関わつてチケット販売に協力している。名古屋においても、東京・大阪と同様に新聞社の主催・後援の公会堂や講堂での催しが行われ、成功した。ただし、東京と異なり、布池の名古屋能楽堂開館以降は、それほど公会堂での催しはなかったのではと予想される。名古屋能楽堂の定員は、「昭和六年四月二十五日 舞台開記念 社団法人名古屋能楽会」繪葉書表紙の「社団法人 名古屋能楽堂建築工事概容」を引用すると「△定員 椅子席 参百拾四脚 貴賓席 壹席 座席 四人詰 四拾席 式人詰 四席」である。呉服町能楽堂が升席であつたことと異なり椅子席主体で、一人席単位で購入できる。また椅子席・座席の人数の合計から、名古屋能楽堂の定員は五百人弱であつたと考えられる。名古屋梅若会のチケットが「名古屋能楽会」のチケットを販売している所で売られるように、公会堂・講堂で催される能であっても実際には能楽堂で能を以前から見ていた「常連客」が観客の多くを占めていたと考えられる。「新規」の全く能を観たことのない観客が大挙して購入するよ

うな能は、戦前の名古屋では多くはなく、強いて公会堂で行なわなくともほとんどの催しは収容人数五百人弱の名古屋能楽堂で事足りたと予想されるのである。

名古屋においても昭和初期の時点で伊藤家・関戸家といった従来の後援者のみでは能の維持が出来ない状況があり、一方「一席単位」の席を購入して能を見たいという観客がかなり増えてきたのは確かである。そして能楽の宣伝についても、新聞・ラジオといったメディアが大きな影響を果たしつあった。華族・大商人から知識人階級へ、能楽の後援者の交代は、東京でも名古屋でも急速に起こりつつあり、これら能楽堂以外の催しはその象徴的な「事件」であったと言える。

注

- (1) 『大正の能楽』 倉田喜弘 編著 国立能楽堂調査養成課編集 日本芸術文化振興会 平成十年三月発行 三三一―三三二頁
- (2) 『大正の能楽』 注(1) 三三四―三三五頁
- (3) 『大正の能楽』 注(1) 二九六―二九八頁
- (4) 『大正の能楽』 注(1) 二七六―二七七頁
- (5) 『大正の能楽』 注(1) 三八二―三八五頁
- (6) 「メディアと能楽」――SPレコードと朝日新聞社主催能を中心として ―― 拙稿 『椋山国文学』 第三十一号 椋山女子園大学国文学会 平成十九年三月発行 二一―三三頁
- (7) 「昭和初期の能楽――朝日講堂からの《土蜘蛛》『中継放送』を中心に――」 拙稿 『催花賞受賞記念論文集』 東海能楽研究会 平成十九年三月発行 二五―三三頁
- (8) 『大正の能楽』 注(1) 四一〇―四一一頁

- (9) 『小鼓芸話』 田鍋惣太郎著 わんや書店 昭和三十三年六月発行 一四四―一四五頁
- (10) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十日七面
- (11) 「新愛知新聞」 注(10)
- (12) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十一日二面
- (13) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十日夕刊一面
- (14) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十一日夕刊一面
- (15) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十日
- (16) 「新愛知新聞」 昭和五年十月十一日八面
- (17) 『小鼓芸話』 注(9) 一四六頁
- (18) 「新愛知新聞」 昭和六年四月三日五面
- (19) 「新愛知新聞」 昭和六年四月五日五面
- (20) 「新愛知新聞」 昭和六年十月三日十面
- (21) 「新愛知新聞」 昭和六年十月四日
- (22) 「新愛知新聞」 昭和六年十月六日九面
- (23) 「大阪朝日新聞」 昭和十年十一月二十七日市内版
- (24) 「昭和六年四月二十五日 舞台開記念 社団法人名古屋能楽会」 絵葉書写真 『催花賞受賞記念論文集』《資料編》第二部 名古屋の能楽の歩み 注(7) 一四五頁

補記

本稿は平成十八年度放送文化基金助成による成果の一部となります。

* 文化情報学部 文化情報学科